

第1回京都市民健康づくり推進会議食育推進部会における主な意見

1 意識調査について

(1) 設問について

○おぼんざいの設問について、魚が使われている料理が少ない。それぞれの食育の取組状況も踏まえ、分け隔てなくデータを取れるよう考慮してほしい。

(2) 主な結果について

○小学校5年生、中学校2年生の調査で、少し結果が低下している部分については、親の意識の低下の問題かもしれない。

○自立を迎える20歳代で朝食の喫食率が大きく低下しているが、この年代が、一番支援・指導が届きにくいということが分かった。全市あげてこれらの年代への取組を実施できないか。

○朝食を食べない理由として「時間がない」が一番多いが、「時間がない」と自体が問題である。

○3歳児の保護者で、食物アレルギーが「ある」と回答した方が9.3%もいた。本来、食物アレルギーは、乳児で10%、3歳になると半分くらいである。9.3%の「ある」と答えた方のうち、半分ほどの方は、実際はアレルギーはなくなっているはずであるが、「ある」と思い、卵や大豆、小麦等の除去を続けているということがこの結果からよく分かった。食物アレルギーはやがて減っていく、除去する食べ物は減っていくということをもっと市民に伝えなくてはならない。

○調査の中で『旬のもの』という言葉が出てこない。魚や野菜、果物には旬があるので、旬を考えながら食生活を送るということを次のプランの中に入れてはどうか。

2 次期プランにおける食育の方向性等について

○食育の取組は、ここ最近、充実して展開されているので、それらを次のプランにどのように反映していくかを議論する時であると思う。

○その時にはタイムリーな取組で、先を見通したものだったとしても、時代

の流れの中で変化し、次の世代になると課題の方が大きく見えてくるということがある。

○社会情勢，家庭環境が変わり，家族揃って食事をしづらい環境。そのような背景も食育では，考慮すべき。

○子どもたちは，20歳くらいの自立する時に自分では食事を作ることができないため，食べなくなるのではないか。自分が生き抜いていくためには，食べることが基本となるということをもう少し教育の場でしっかりと植え付けられないか。自分で食事を準備する力を身につけさせる必要があると思う。

○子どもたちへの食育について，「親の意識」と「本人の意欲」両方のアプローチの兼ね合いは大切。また，食は一人では楽しくないということを考えて取り組みたい。

○小さい時から親が子どもにしっかりと「噛むこと」を教えてほしい。よく噛むことは，元気に長生きするために大切なこと。

○調理法によって，いかに栄養を崩さないようにしたり，その食材から出た汁，あるいは美味しさをソースにして残して食べるかということも伝えることが重要。

○前回の重点課題の一つに「保育所（園）・幼稚園・学校での子どもたちへの食育の推進」というものがあつたが，今回は，その文言が消えている。京都市の方針が変わつたと捉えられるのではないか。京都市も様々な取組を推進されているし，各園，学校でも頑張っているので，保育園・幼稚園・学校での取り組みに関する文言を入れていただきたい。

○次期プランの方向性については，現プランとの整合性という部分でも，とても整理がされていて分かりやすかつた。

○次期プランについては，おおまかには非常にいい方向に向かって進んでいるのではないか。本日の意見も踏まえて検討いただき，京都らしきもあるプランにしていきたい。

2 京都市の取組等について

○学校給食における「和食」の検討会議を通し，月1回和食推進の日を設けて「和（なごみ）献立」を実施している。和食を通して食の安全安心や自ら

主体的に考えて行動し、生きる力を培うということに取り組んでいるので、次期プランでもそれらの取組を充実させていきたい。

○給食献立は、家庭と違い集団調理であるため、安全性を絶対視し、調達から調理まで時間の制約がある。現在は、従来の釜だけの調理だけでなく、試行的だがスチコンを入れて少しでも献立の幅を広げることも進めている。子どもたちへは、和食に親しむ取組など食育の取組を強化している。

○中央卸売市場では、広く食品を扱い、京都市の皆様在台所の入口であり、次のプランでも掲げられている地産地消や栄養の面、食の安全安心の部分で果たす役割は大きいのではないかと考えており、京都市民の健康づくりに力を果たしていきたい。